

## Riemann-Zeta 関数の値の数論的性質について Arithmetic properties of values of the Riemann zeta-function

○鈴木 雄大  
Yudai Suzuki<sup>1</sup>

### Abstract

The value at 2 of the Riemann zeta function  $\zeta(z)$  can be proven irrational, via the fact that the value  $\zeta(2)$  is a rational multiple of the square of  $\pi$ . However, this method is applicable only to the values at even numbers. In this talk, we introduce a proof due to F. Beukers, based on Padé approximation, a number-theoretic approach, which enables us to show directly investigate general values of the Riemann zeta function.

### 1 Riemann $\zeta$ 関数

Riemann  $\zeta$  関数は  $s$  が複素数の範囲で定義されているが、本稿では実数に限って議論を進める。

#### Definition

Riemann  $\zeta$  関数とは、実数  $s > 1$  に対して

$$\zeta(s) = \sum_{n=1}^{\infty} \frac{1}{n^s}$$

で定義される関数のことである。以後  $\zeta$  関数と表記する。

$p > 1$  を素数としたとき、 $s > 1$  に対して、オイラーによって発見された恒等式  $\zeta(s) = \prod_p \frac{1}{1-p^{-s}}$  が成立

することが知られている。これより、素数全体にわたる積で表される  $\zeta$  関数に関して調べることは素数の解明に役立つ。このことから  $\zeta$  関数について調べることは重要視されている。

本講演ではこの Riemann  $\zeta$  関数の数論的性質、特に  $\zeta(2)$  の無理数性について論ずる。

#### Proposition 1 (L.Euler)

$$\zeta(2) = 1 + \frac{1}{2^2} + \frac{1}{3^2} + \dots = \frac{\pi^2}{6}$$

**Proof**  $\frac{1}{\sin^2 x} = \frac{1}{4 \sin^2 \frac{x}{2} \cos^2 \frac{x}{2}} = \frac{1}{4} \left( \frac{1}{\sin^2 \frac{x}{2}} + \frac{1}{\sin^2 \frac{\pi+x}{2}} \right)$  であることを用いると、

$$\begin{aligned} 1 &= \frac{1}{\sin^2 \frac{\pi}{2}} = \frac{1}{\sin^2 \frac{2}{\pi}} = \frac{1}{4} \left( \frac{1}{\sin^2 \frac{\pi}{4}} + \frac{1}{\sin^2 \frac{3\pi}{4}} \right) \\ &= \frac{2^{2^{n-1}-1}}{4^n} \sum_{k=0}^{2^{n-1}-1} \frac{1}{\sin^2 \frac{(2k+1)\pi}{2^{n+1}}} \end{aligned}$$

ここで、 $n \rightarrow \infty$  とすれば、 $\lim_{N \rightarrow \infty} N \sin \frac{x}{N} = x$  であることから、 $N = 2^n, x = \frac{(2k+1)\pi}{2}$  と取り直せば、

$$\begin{aligned} \frac{2^{2^{n-1}-1}}{4^n} \sum_{k=0}^{2^{n-1}-1} \frac{1}{\sin^2 \frac{(2k+1)\pi}{2^{n+1}}} &= \frac{2}{N^2} \sum \frac{1}{\sin^2 \frac{x}{N}} \\ \rightarrow 2 \sum \frac{1}{x} (N \rightarrow \infty) &= \frac{8}{\pi^2} \sum \frac{1}{(2k+1)^2} \\ x = \sum \frac{1}{n^2} \text{ とおくと, } \sum \frac{1}{(2n)^2} &= \frac{1}{4} \sum \frac{1}{n^2} = \frac{1}{4} x \text{ より} \\ x = \frac{1}{4} x + \frac{\pi^2}{8} \therefore x &= \frac{\pi^2}{6} \quad \square \end{aligned}$$

#### Proposition 2 (F.Beukers)

$\pi^2$  は無理数である。

#### Proof

$$P_n(x) = \left( \frac{1}{n!} \right) \left( \frac{d}{dx} \right)^n x^n (1-x)^n,$$

$$I_n = \int_0^1 (\sin \pi t) P_{2n}(t) dt$$

という関数に対して部分積分を  $2n$  回行えば、

$$\begin{aligned} I_n &= \left( \frac{1}{(2n)!} \right) \int_0^1 (\sin \pi t) \left( \frac{d}{dt} \right)^{2n} t^{2n} (1-t)^{2n} dt \\ &= (-1)^n \left( \frac{\pi^{2n}}{(2n)!} \right) \int_0^1 (\sin \pi t) t^{2n} (1-t)^{2n} dt \end{aligned}$$

となり、 $0 \leq t \leq 1$  なので

$$|I_n| < \left( \frac{\pi}{4} \right)^{2n} \left( \frac{1}{(2n)!} \right)$$

であり、 $I_n \neq 0$  である。一方、 $I_n$  を展開すると、各項に  $\int_0^1 t^m (\sin \pi t) dt$  ( $m$  は  $4n$  以下の偶数) の項を持っていることより部分積分すると

$$\begin{aligned} \int_0^1 t^m (\sin \pi t) dt &= \frac{1}{\pi} [-t^m \cdot \cos \pi t]_0^1 + \frac{m}{\pi} \int_0^1 t^{m-1} \cos \pi t dt \\ &= \frac{1}{\pi} - \frac{m(m-1)}{\pi^2} \int_0^1 t^{m-2} (\sin \pi t) dt \end{aligned}$$

ここで、 $A_n$  を整数係数の多項式とすれば、 $I_n = \pi^{-1} \cdot A_n(\pi^{-2})$  となる。

今、 $\pi^2 = \frac{p}{q}$  ( $p, q \in \mathbb{Z}, q > 1$ ) とおいて矛盾を導く。 $I_n \neq 0$  であることから、

$$\frac{1}{\pi p^n} \leq \left| \left( \frac{1}{\pi} \right) \cdot A_n \left( \frac{q}{p} \right) \right| = |I_n|$$

$|I_n| < \left( \frac{\pi}{4} \right)^{2n} \left( \frac{1}{(2n)!} \right)$  であったので、上の式と比べれば  $\frac{1}{\pi p^n} \leq |I_n| < \left( \frac{\pi}{4} \right)^{2n} \left( \frac{1}{(2n)!} \right)$  となるが、これより  $\frac{1}{\pi} < \left( \frac{\pi \sqrt{p}}{4} \right)^{2n} \left( \frac{1}{(2n)!} \right)$  となり、 $n$  を十分大きく取ると矛盾。よって  $\pi^2$  は無理数。  $\square$

ここで Proposition1, Proposition2 を合わせて考えれば,  $\zeta(2)$  が無理数であることは容易にわかるが, この考え方は  $\zeta(2)$  が  $\pi^2$  と有理数の積である事に依存しており, 偶数の値以外に対する値の無理数性の考察に適用できない. そこで,  $\zeta(2)$  に対して, 無理数性を直接証明する方法を考察する.

## 2 $\zeta(2)$ の無理数性

この章では, Padé 近似という数論的な近似を用いて,  $\zeta(2)$  が無理数であることを直接示した F. Beukers の証明を紹介する.

$d_n$  を 1 から  $n$  までの整数の最小公倍数とする. このとき  $d_n = \prod_{p \leq n} p^{(\log n / \log p)}$  (但し  $p$  は素数) である.

$\zeta(2)$  の無理数性を証明するために, まずは以下の補題について考える.

### Lemma 1

(a)  $r$  と  $s$  を正の整数とする. このとき  $r > s$  とすれば,

$\int_0^1 \int_0^1 \frac{x^r y^s}{1-xy} dx dy$  は有理数で, 分母は  $d_r^2$  の約数である.

(b)  $r = s$  のとき,

$\int_0^1 \int_0^1 \frac{x^r y^r}{1-xy} dx dy = \zeta(2) - \frac{1}{1^2} - \frac{1}{2^2} - \dots - \frac{1}{r^2}$  となる.

### Proof

$$\int_0^1 \int_0^1 \frac{x^r y^s}{1-xy} dx dy \tag{1}$$

に対して,  $(1-xy)^{-1} = \sum_{k=0}^{\infty} x^k y^k$  より

$$\begin{aligned} \int_0^1 \int_0^1 \frac{x^r y^s}{1-xy} dx dy &= \int_0^1 \int_0^1 \sum_{k=0}^{\infty} x^{k+r} y^{k+s} dx dy \\ &\therefore \sum_{k=0}^{\infty} \frac{1}{(k+r+1)(k+s+1)}. \end{aligned} \tag{2}$$

このときの (1.2) 式の合計は

$$\begin{aligned} &\sum_{k=0}^{\infty} \frac{1}{r-s} \left\{ \frac{1}{(k+r+1)(k+s+1)} \right\} \\ &= \sum_{k=0}^{\infty} \frac{1}{r-s} \left\{ \frac{1}{k+r+1} - \frac{1}{k+s+1} \right\} \\ &= \frac{1}{r-s} \left\{ \frac{1}{s+1} + \dots + \frac{1}{r} \right\} \end{aligned}$$

となり, (a) が成立する.

また,  $r = s$  とすれば, (1.1), (1.2) 式より

$$\int_0^1 \int_0^1 \frac{x^r y^r}{1-xy} dx dy = \sum_{k=0}^{\infty} \frac{1}{(k+r+1)^2}$$

が得られ, (b) が成立する.  $\square$

## Theorem 1 (Theorem1,[1])

$\zeta(2)$  は無理数である.

### Proof

正整数  $n$  に対して,

$$\int_0^1 \int_0^1 \frac{(1-y)^n P_n(x)}{1-xy} dx dy \tag{3}$$

を考える. ここで  $P_n(x)$  は  $n!P_n(x) = \left\{ \left\{ \frac{d}{dx} \right\}^n x^n (1-x)^n \right\}$  によって定義されるルジャンドル多項式である.

$P_n(x)$  は整数係数の多項式であり, Lemma 1 より (1.3) 式は  $(A_n + B_n \zeta(2))d_n^{-2}$  となる ( $A_n$  と  $B_n$  は  $n$  によって定まる整数).

また, (1.3) 式を  $x$  について  $n$  回部分積分すると,

$$(-1)^n \int \frac{y^n (1-y)^n x^n (1-x)^n}{(1-xy)^{n+1}} dx dy. \tag{4}$$

ここで,

$$\frac{y(1-y)x(1-x)}{1-xy} \leq \left\{ \frac{\sqrt{5}-1}{2} \right\}^5 \quad (0 \leq x \leq 1, 0 \leq y \leq 1)$$

より, これを用いて (1.4) 式を上から評価すると,

$$\begin{aligned} &\int \frac{y^n (1-y)^n x^n (1-x)^n}{(1-xy)^{n+1}} dx dy \\ &\leq \left\{ \frac{\sqrt{5}-1}{2} \right\}^{5n} \int \frac{1}{1-xy} dx dy = \left\{ \frac{\sqrt{5}-1}{2} \right\}^{5n} \zeta(2) \end{aligned}$$

となり, (1.4) 式が 0 ではないことから

$$0 < |A_n + B_n \zeta(2)| d_n^{-2} < \left\{ \frac{\sqrt{5}-1}{2} \right\}^{5n} \zeta(2)$$

となり,  $n$  を十分大きく取って考えると

$$\begin{aligned} 0 < |A_n + B_n \zeta(2)| &< d_n^2 \left\{ \frac{\sqrt{5}-1}{2} \right\}^{5n} \zeta(2) \\ &< 9^n \left\{ \frac{\sqrt{5}-1}{2} \right\}^{5n} \zeta(2) < \left( \frac{5}{6} \right)^n \rightarrow 0 (n \rightarrow \infty). \end{aligned}$$

$\zeta(2)$  が有理数であると仮定すると,  $|A_n + B_n \zeta(2)|$  は  $n$  の値に関係なく下に有界であることから, 矛盾が生じる. よって  $\zeta(2)$  は無理数である.  $\square$

## References

- [1] F. Beukers, *A note on the irrationality of  $\zeta(2)$  and  $\zeta(3)$* , Bull. London Math. Soc., **11**, (1979), 268–272.
- [2] J. Hofbauer, *A Simple Proof of  $1 + \frac{1}{2^2} + \frac{1}{3^2} + \dots = \frac{\pi^2}{6}$  and Related Identities*, Amer. Math. Monthly, **109**, (2002), 196–200.